

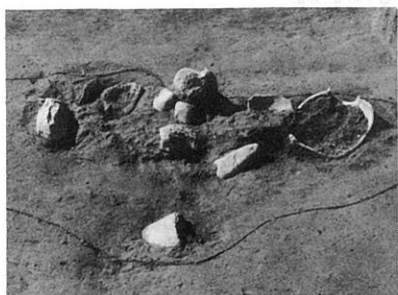
長野県埋蔵文化財センター

No. 13

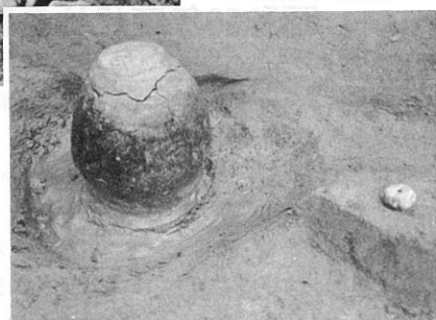
1985.5.1

(財)長野県埋蔵文化財センター

松塩 筑調査事務所
〒399-07 塩尻市広丘高出1977
TEL 0263-54-2150



写真左上・右下
遺物出土状況



矢原遺跡 一穂高町一

馬場街道遺跡発掘調査員 寺島俊郎・市川隆之

矢原遺跡は、南安曇郡穂高町矢原に所在する。烏川扇状地の東側扇端部に位置し、標高533mを測る。

本遺跡の発掘調査は、中央道豊科インターへの取り付け道路となる県道柏矢町田沢停線の拡張工事に伴い穂高町教育委員会が主体となって、昭和59年10月13日から昭和60年1月12日まで行った。発掘面積は、幅約6mで1300㎡である。

矢原地籍には、多くの遺跡・包蔵地が登録され隣接し合っている。また、ここは律令時代から中世に至り「矢原郷（庄・御厨）」の中心部と推定されており、当調査では、当地籍及び付近に所在する諸遺跡を総称して矢原遺跡とした。

検出された遺構は、古墳時代中期の住居址（和泉式）2、古墳時代末期の住居址（鬼高式）2、奈良時代の住居址2、平安時代の住居址2・掘立柱建物址1・土壇1、鎌倉時代の住居址1・製鉄関係遺構1・小竪穴1・土壇1であり、時代不明土壇5であった。

遺物は、弥生式土器、土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、青磁（元朝）、鉄製品の刀子・鎌・鉄滓等があり、石製品は、打製石斧・砥石・紡錘車で、その他に古銭（元豊通宝・聖宋元宝）が出土した。

古墳時代中期から鎌倉時代にかけての複合遺跡であり、矢原郷（庄）との関係が注目される。

埋蔵文化財センター

4年目を迎えて

常務理事 三村 忠幸

昨年の4月初旬ころは、そちこちに残雪があり、調査地点が山あいにあることから調査開始が遅れるのではないかと危惧をしたのですが、ことしは3月中葉種づゆで雪まじりの日もありましたが、幸いに残雪は少なく一安心というところでした。

例年のことながら、この時期は転入職員の研修とか発掘調査計画の細部のツメ、作業員の確保、必要物品の購入等々多忙を極めるわけですが、とりわけ、ことしは、副理事長の常勤のほか事務2名、調査研究員27名の増員で一举に総勢57名と大所帯となったので、なおさらです。

事務所の増改築も3月の悪天候に悩まされながらも突貫工事のお陰で漸くできあがり、職員の増員に伴うスペースの確保並びに環境整備等ができました。

それというのも、中央道長野線の豊科町までの供用開始が、昭和62年度をその目標とする県政の重点施策であることと、また、県民の悲願であることを踏まえ、これに対応しての調査組織の強化と増員を図ったからであります。

工事工程を左右する用地買収は、過去3か年にくらべ、関係機関の御努力が実り順調に進み、発掘調査の可能な地点が増したことから、ことしの調査面積は塩尻市地籍の10遺跡81,990㎡、松本市地籍の7遺跡103,210㎡、合計17遺跡185,200㎡を当面の目標としました。

この面積は、いままでの3か年で調査した面積を約75,000㎡上回るものです。

また、この調査地域は、昨年の一部調査で平安時代の一大集落址が予測される吉田川西遺跡、更には新村条里遺跡等々貴重な遺跡の多いところであります。

これだけの大規模でしかも質的に高い遺跡の調査でありますので、当センターにおきましては職員の質的向上を図る研修の実施はもとより、地域の方々、関係機関、有識者の皆様の従前にも増した格別な御指導、御協力を賜りながら、的確な調査に最大の努力を傾注して参りたいと存じます。

なお、昨年実施しました出土遺物の展示会、現地説明会には多数の参加者がありました。ことしも引き続き積極的に実施したいと考えておりますし、また当センターの一年間の活動をまとめた年報の発行も予定しております。

何とぞ、ことしもよろしくお願い申し上げます。

昭和60年度(財)長野県埋蔵文化財センターの組織機構

○理事長

理事長	〇村山 正	(県教育長)
副理事長	〇河原田幸雄	
常務理事	三村 忠幸	
理事	〇池田 宗兵衛	(県企画局長)
"	〇小山 一郎	(県高速道局長)
"	宮下 哲	(県教委文化課長)
"	大沢 和夫	(県考古学会長)
"	小野 光洪	(塩尻市長)
"	奥村 秀雄	(長野市教育長)
"	林 茂樹	(考古学研究者)
監事	神野 久雄	(県会計課長)
"	〇萩原 秋夫	(県教委総務課長)

○事務局

松塩筑調査事務所	
事務局長	山崎 昭三
総務部長	堀内 計人
調査第一部長	〇樋口 昇一
調査第二部長	〇丸山敏一郎
調査第三部長	春原 正毅
主事	〇六川 直利
"	〇宮越ゆり枝
"	〇笠井 浩

調査研究員

〇中村 千尋	〇福島 厚利	〇関 全寿	〇田川 幸生
〇松田 青樹	〇西牧 尚人	〇中島 経夫	〇小林 上
小松 望	〇高野 博正	〇春日 文彦	唐木 孝雄
市沢 英利	〇百瀬 新治	〇岡沢 秀紀	〇北原 正治
〇伊藤 隆之	小平 和夫	小口 徹	〇井上 城典
〇小室 邦夫	原 明芳	〇和田 文人	〇小林 俊一
〇飯沼 潤	〇百瀬 久雄	〇石上 周蔵	〇馬場 長光
田中正治郎	小菅 敏男	遠山 芳彦	〇小松 宏昭
〇百瀬 長秀	金原 正	〇青柳 英利	〇三上 徹也
井口 慶久	〇関 賢司	〇鈴木 道徳	〇春日 雅博
〇望月 映	〇市村 勝巳	〇斉藤 正善	〇平林 彰
〇市川 隆之	〇黒岩 竜也	〇中野 亮一	
調査員			
〇百瀬 陽三	〇尾川 秀吉		

(〇印 新任)

松塩筑調査事務所

長野県塩尻市大字広丘高出字西原1977

〒399-07 電話 (0263)-54-2150(代)

埋文施設紹介



須坂市立博物館

〔建物の概要〕 この博物館は、昭和35年から須坂市文化財調査員に委託して調査・収集した各種文化財を収蔵・展示する施設として、昭和41年7月に新築・開館した。敷地面積は1,195㎡、延床面積710㎡、耐火ブロック積、2階建一部3階となっている。資料は4部門に分けて、4部屋に展示している。また、昭和54年には収蔵庫と特別展示室を増築し、増加する資料の収蔵、各種特別展ができるようになった。

〔展示〕 1階の第1室は須坂藩を中心とした近世資料である。須坂藩10,053石（13か村）は慶長年間より堀氏の所領となり、明治維新まで14代270年続いた。須坂藩の中心となった堀氏の館は全く残っていないが、足軽長屋と呼ばれている下級家臣の長屋3棟はかろうじて昔の面影を残している。展示している資料は、南蛮風の特異な円錐形兜をはじめ非常に精巧な雑道具一式、残っているが少ないといわれている毛槍さや及び藩士の丸山文書などである。

1階の第2室は養蚕・製糸関係を中心とした近代資料である。須坂はかつて岡谷とならんで生糸で栄えた町である。明治に入って機械製糸が急速に発展し、全盛期の明治14年には製糸工場が35を数えた。この製糸工場関係資料を主に展示している。

2階の第3室は美術品である。主に江戸時代後期にこの地で焼かれた吉向焼を展示している。吉向焼は須坂藩主の招きに応じて、天保15年から嘉永6年まで9年間吉向父子が焼いた焼物で、中に善光寺香炉と呼ばれている善光寺の土産などがある。

2階の第4室が考古資料となっている。縄文時代では、全国的に有名になっている石小屋洞穴から草創期の微隆起線文土器が出土しているが、残念ながらこの

土器は東京にあるため、模造品を展示している。このほか洞穴や岩陰など山岳遺跡の遺物が特徴である。また、平地遺跡では三入道遺跡や橋場遺跡など中期から後期にかけての遺跡が多く、その出土遺物が展示されている。

弥生時代はしっかりした遺跡はほとんどないが、須坂園芸高校から出土した完形の壺形土器と筒形土器が展示されている。これはこの地方の弥生時代初期の特徴的な土器として市有形文化財に指定されている。なお、この時代に山岳地帯の洞穴や岩陰にも狩猟生活をしてきた人々がおり、この地方の特色である。

古墳時代は県史跡に指定されている鎧塚古墳出土品は重要な遺物が多いため、市有形文化財に指定されている。特にこの中で、鍍銀青銅製獅噛文鍔板と呼ばれている帯金具は精巧なもので、大陸文化との深い交流を物語る貴重な遺物である。また、この種のものには珍しい銀を主体とした金銀合金のメッキが施されていることも見逃せない。

天神第1号墳から出土した埴輪は県内では数少ない豊富な内容で、特に家形埴輪は精巧な文様が描かれており、県内初出土である。



鍍銀青銅製獅噛文鍔板

〔特別展・行事〕 特別展は年3～4回開催しており、特に「きのこ展」は毎年開催し、本年は第16回目をむかえる。なお、この他に本年度は「畦地梅太郎版画展」や「指定文化財展」などを予定している。行事としては、「探鳥会」なども計画している。

〔利用案内〕

所在地：〒382 須坂市臥竜公園内

(02624—5—0407)

休館日：毎週月曜日、国民の祝日（ただし4～10月は翌日）年末年始

入館料：	平常展	特別展
大人	70円	100円
小中学生	20円	30円

20名以上の団体は2割引

交通：須坂駅下車徒歩20分

発掘調査紹介

佐久市 大井城(黒岩城)跡

佐久市教育委員会 小山 岳夫

大井城跡は佐久市岩村田に所在し、湯川の西岸標高710m内外の切り立った台地上に占地している。昭和59年度の小集落地区対策事業に際して県史跡指定が一部解除されることになり、緊急に調査して記録保存するはこびとなった。

大井城跡は鎌倉～室町時代に存続した城と文献に記されており、北から石並城・王城・黒岩城の三城からなっている。今回は、黒岩城の南端部約3500㎡が調査された。検出された遺構は以下のとおりである。

弥生時代	土壇	1基
古墳時代後期	住居址	15軒
時期不明	掘立柱建物址	3棟
中～近世	竪穴状遺構	54基
	土壇	288基
	溝状遺構	2基



竪穴状遺構

中世の遺構で特に注目される竪穴状遺構は、台地上に広く分布している。平面形態は方形か長方形を呈し、規模は一辺2m内外の小規模なものから一辺5mを超える大規模なものまで様々である。確認面からの壁高は70～80cmを測る例が多く、他の遺構に比べると一様に深い掘り込みをもつ傾向にある。また、壁外に入口施設と考えられる張り出し部を有する例や、壁下の床面上に小規模な柱穴が規則的に配列(一辺に4～12個)される例も数多くみられることから、この遺構が何かの建物址であることが想定できる。

遺物は内耳の土鍋、土師質の小皿(かわらけ)、輸入

陶磁、国産陶器のほか、鉄・青銅製品、石臼、茶臼、砥石等が多量に出土しており、陶磁器類の分析によって今まで不明確であった土鍋やかわらけの年代が明らかになるものと思われる。



遺物出土状況

土壇は、288基検出されたうち約半数が方形を呈するもので、この中には掘り込みは浅いものの、竪穴状遺構とほぼ同じ性格をもつと考えられるものもある。円形土壇は、墓址的な要素が強い。出土遺物は竪穴状遺構とほぼ同様であるが、人・獣骨が検出される例も多くみられる。

最後に竪穴状遺構の性格についてふれておきたい。

古墳時代後期の住居址はほとんどが近接した時期に構築されたものと考えられ、当時の集落構成を考える上での好資料である。出土遺物も豊富で、焼失住居址からは、土師器甕・甔・杯・高杯、須恵器蓋・杯のセット等、完存品が特に多量に出土している。

中世の竪穴状遺構は、東日本各地の城跡・館跡に関する遺跡で数多くの検出例をみるが、性格については、住居址・地下倉庫・厩等意見が様々に分かれており、明確な位置付けはなされていない。調査団では今後この問題を詳細に検討し、究明したいと考えている。

その他、台地の東側にある現水田からは、中世の水田址も検出された。

長野市 大室古墳群の調査

明治大学考古学研究室

大塚初重・小林三郎・石川日出志

大室古墳群は、長野市松代町大室地区を中心にほぼ2.5km四方の範囲にひろがる総数約500基の東国固有数の古墳群である。本古墳群は分布上5つの支群に分かれ、このうち谷から山麓部に立地する大室・北谷の2支群

は積石塚の円墳がほとんどを占め、その数は日本で最も多く、明治年間以来たびたび調査・研究がなされてきた。そこでは、積石塚を主体とし、合掌形石室をもつ等の点で高句麗・百濟といった半島的色彩をおび、しかも文献の上で信濃に天智5年以後渡来人の記載が多く、大室の地が『延喜式』にみえる官牧の大室牧に比定されており、大室古墳群を形成した集団が馬匹生産等の専門技術をもつ渡来系氏族であった可能性が論じられてきた。

ところが、盗掘された古墳は多いものの、厳密に発掘調査や実測が行われた古墳はごく一部に限られ、また現存する遺物も出土古墳が不明な例が多いために、本古墳群の形成過程を具体的に分析することができないままであった。そこで明治大学考古学研究室では、長野市立博物館の協力と文部省科学研究費の助成をうけて、東国における積石塚古墳の歴史的な性格を追究する一環として、まず大室谷支群から分布調査・墳丘と石室の実測・発掘調査を開始した。



第220号墳

分布調査は栗林紀道氏や駒沢大学の成果をもとに、現状確認とともに墳丘の構築法や石室の構造を調べ、写真撮影と計測及び略測図の作成を行っている。今年度は村東・大石・とび岩の3単位群に属す47基を点検し、横穴式石室でも袖部の有無、玄室の胴張りの有無、玄室の長幅比や平・断面形などからいくつかは類別することができる。各類別が年代か被葬者の性格の違いのいずれに基くかはなお決めがたいが、合掌形石室と共に各類別が混在して各単位群が形成されていることがわかる。

ついでトラバース測量によって古墳の位置関係を計測し、墳丘と石室が良く遺存する例は実測図を作成して、分析の基礎資料とした。石室の床面を露呈させない状態での実測図は自ずと限界はあるが、発掘した石室のデータを援用することによって有効な資料となろう。

今年度はニ・23・24・25・26A・26B・26C・220・239・240・243・244・248号墳を終了した。

墳丘・石室ともよく特徴を表わしている第220・244号墳は、現状実測だけでなく、石室の発掘調査も実施した。第244号墳は通称將軍塚と呼ばれ、大室谷支群のなかでも入口部に位置し、墳丘・石室とも最大規模を誇るいわば盟主的古墳である。直径わずか22mの円墳であるが、高さ8.2mと、墳径の割に墳高が著しく高い特徴的な外形を呈している。墳丘の外周は近世城郭の石垣を思わせる、堅固な石積みがほぼ全周にめぐっている。墳丘上半部は土石混合で構築されているが、下半部は未掘のため不詳である。石室は全長11.5mをはかる両袖型の横穴式石室である。一部粗く加工した巨石の間に小石を挟んで構築された玄室は、長さ6.6m、現高2.4mで、奥壁は1枚石である。羨道部とその前面を発掘した結果、羨道床面は板石を敷きつめ、羨道先端には石列をめぐらしていた。羨道部閉塞石中から、破片となった須恵器の大甕・杯・杯蓋・長頸壺・甕、土師器の脚付壺、鍍金青銅製の馬鈴、羨道左側墳丘から埴輪片が出土した。須恵器は6世紀後半の特徴をそなえ、馬鈴は直径4.6cmの円球状を呈し、中央には一条の突帯がめぐる。

第220号墳は、第244号墳の南東約400m（大石単位群）にある、長径9.2m、短径8m、高さ最大3.2mの小円墳である。墳丘は土石混合で構築され、外周は急峻な石積みめぐるしてある。真西に開口する両袖型の横穴式石室をもち、今年度は玄室のみ発掘した。長さ4.8m、幅1.7m、高さ2mの玄室は盗掘を受けていたが、玄門部寄りの床面が残存しており、そこから刀子・鉄鏃・辻金具(?)・鉄片(直刀?)・水晶製切子玉が発見されたが、構築年代は限定できなかった。

以上、第1次調査の概略を記したが、今回調査した古墳は大室谷支群全体のごく一部にすぎない。今後も長期的に継続調査を行って、大室古墳群の内容と形成過程を明らかにし、その歴史的な性格を究明したいと考えている。



鍍金青銅製馬鈴

市町村だより

塩尻市 平出遺跡の環境整備

塩尻市教育委員会 小林 康男

平出遺跡は、松本平の南端、塩尻市宗賀平出にあり、昭和20年代に大がかりな発掘調査が行われ、昭和27年には国の史跡に指定された。その後、30年近い歳月が経過し、遺跡を取り巻く環境も大きく変化し、その保存にも影響が及ぶようになったため、昭和51・52年度の両年にわたり、保存管理計画を策定し、爾後の保存管理・活用方針を決定した。

市教委では、現在、これに基づいて事業を進めているが、その主なものは、指定地の土地の公有化及びその地区の環境整備、史跡指定地区外の施設の充実の2点を重点的に実施している。



平出歴史公園

史跡指定地区の土地の公有化及びその地区の環境整備は、遺跡を保存しながら市民の憩いの場、学習の場として活用するため、国・県の補助事業として昭和56年度から5か年計画で実施している。今までに公有化された地区は4405㎡で、このうち2882㎡で整備が進められている。環境整備は、(1)遺跡を保護し、後世に伝える一方、現在の市民生活の生活空間の一つとしても活用をはかる。(2)市民や見学者の憩いの場、学習の場として利用される親しみある場とする。(3)古墳時代の集落を中心とし、当時の生活環境も復元し、整備する。(4)駐車場は指定地外の隣接地に確保する。の4つの基本方針を立て実施している。

すでに整備したものとしては、第62号復原住居址、休憩所、便所の建設、地下遺構保存のための土盛、植栽がなされており、今後、第11号及び第61号住居址の表面表示、体験学習広場、説明板、駐車場の設置、植

栽を行うことになっている。全体的には復原住居を中心とする園路、広場、芝生地の開放的な空間とし、利用者が違和感なく解け込むことができ、親しみをもって学習したり休憩しながら、当時の環境や生活に思い巡らすことのできる空間とするよう作業を進めている。

一方、この史跡指定地内の環境整備とは別に、市の単独事業として史跡指定地の南500mにある博物館周辺を歴史公園として整備を進めている。平出遺跡には、昭和26年、古墳時代のものとしては全国でも最も早くに建設された第3号復原家屋があったが、その土地を地主に返還することになり、学術上記念碑的な意義を持つこの復原家屋を博物館わきに移築し、学術の用に供することとなった。これを契機として博物館周辺の山林6000㎡を歴史公園として整備することになり、工事が進められている。

歴史公園内には、移築された古墳時代の第3号復原家屋のほかに、昭和27年の発掘で発見された、第3号柱穴址を復元した高床式倉庫(間口7.2、奥行5.7、高さ7m、平安時代初頭)がある。また、公園内に分布する平出第1・第2古墳も整備され、1号はマウンドを、2号は横穴式石室を露出し、内部の構造がよく分かるように整備されている。これら復原家屋・倉庫と古墳は遊歩道で結び休憩用のあずま屋も設置されている。

このほか、周囲には、平出遺跡と関係の深い、折口信夫、大場磐雄、藤島亥治郎の諸先生の歌碑も建てられている。

このように、平出遺跡は古墳時代を中心とした古代の家、倉、墓、そしてそれを取り巻く諸環境の在り方を学習するうえで恰好の遺跡である。今後、史跡公園と歴史公園とを連携し、更に、博物館、民俗資料館を連結することによって、古代農村の様相を学習し、また、休憩の場として活用されればと思う。

塩尻市立平出遺跡考古博物館・歴史民俗資料館
所在地：塩尻市宗賀1011-3 電話0263-52-1022
休館日：月曜日、国民の祝日の翌日、年末年始
入場料：一般100円 小人50円(20人以上団体割引)
交通：塩尻駅からバス約7分、徒歩30分

奈文研研修報告

環境考古課程

調査研究員 井口 慶久

本年1月17日から2月2日までの約半月間、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの専門研修『環境考古課程』を受講した。「古環境復原のための自然遺物の整理・記録に関して必要な専門的知識と技術の研修」ということで、地形環境・土壌・火山灰・動植物・人骨・文化論等について、各分野の第一人者から講義を受けた。

講義内容は多岐にわたり、大変質の高いものであったが、その中で、遺跡調査をする場合に留意すべき事項が多数指摘された。

特に、生産遺跡（水田址等）検出のための、プラントオパール分析の必要性、自然環境から文化論を論ずる思考の幅をもつ必要性、考古学と自然科学の関係を検討する必要性、自然科学の分析・研究成果を報文中に活かす工夫の必要性等、様々な課題があることを痛感した。

プラントオパール（植物珪酸体）分析による、水田址の事前調査は、1980年に島根県の夫敷遺跡で試みられたのをはじめ、1981年の青森県田舎館村垂柳遺跡など10数例を数えている。これは、土壌試料中の珪酸体の定量分析から水田址分布概略図を作成し、その図を基に水田址検出を試みようとするものである。発掘調査による水田址検出は、島根の夫敷遺跡では畦畔上の砂層、青森県の田舎館村垂柳遺跡では火山灰の堆積など特殊条件があったため、比較的容易に行われたらしい。その点、本県においては土層の判別が困難であり、水田址検出には、難点がある。しかし、集落遺跡の調査のみに重点があり、生産遺跡検出調査の不足している現在の状況は一考を要する。本県においても、全県的に水田址検出一層努力することが急務だと痛感した。藤原宏志氏は、縄文中期農耕論とからめて長野県で縄文時代の焼畑を検出したいとの意向も述べられた。しかし、その分析方法には課題があり、現在の段階で、焼畑の推定は大変困難であるという。

文化論に関しては、佐々木高明氏の「ナラ林文化と照葉樹林文化」、渡辺誠氏の民俗学的調査上に立った論、佐原真氏の「騎馬民族は来なかった」についての

講義があった。これらの講義は、古環境、民俗事例、文献等の幅広い知識から総合化された“歴史学”であり、各人の歴史観がうかがえた興味深い内容であった。

考古学と自然科学との関係については、各分野の研究者の立場から、我々が留意すべき事項が示唆された。近年の調査においては、関連諸科学の成果をふまえた分析が盛んに行われるようになり、自然科学者に協力を求める機会が大変多くなっている。しかし、考古学研究者の自然科学者に対する理解が不十分であるためか、自然科学者に各種の分析を依頼しても、その成果を報文中で総合化することなしに、巻末に分析データを添付することにとどまってしまう例が多い。これでは自然科学的分析が意味あるものとして活用されているとはいえない。自然科学者による分析は、考古学研究者により総合化されてはじめて意味をもつものである。この点を考古学研究者は、遺跡の総合的評価を行う際に肝に銘じなければならない。また、我々が自然科学者とのような関係を保ってゆけばよいかも大きな課題である。調査当初からのチーム作りが必要であるが、そうした組織化の遅れは改善しなければならないと思われる。

このほか、注目すべきものとしては、光谷拓実氏の年輪年代学についての報告があげられる。年輪年代学は、樹木の年輪幅の変化を観察することにより、樹木の切られた年を推定しようとする方法であり、それによりその遺構の構築された実年代をも求められる。欧米ではこの分野の研究は古くから進められており、既に6000～9000年前までクロスディティンギングが進んでいるという。光谷氏は5年前からヒノキと高野槇の試料分析に取り組み、ヒノキについては現時点で西暦952年まで、ほぼクロスディティンギングが進んでいるという。更に、試料が集積されれば、弥生時代の墳墓に用いられた木棺の材が切られた実年代が出る可能性も十分もたれ、研究の進展が期待される。

このように考古学を取りまく関連諸科学の進展には、めざましいものがある。我々は、これらの学問の特性と効用を十分理解し、歴史の解明のために大いに活用しなければならないと思う。だが、盲信すると思わぬ陥穽に陥るおそれのあるものもあり、今後われわれが自然科学の成果をどのように用いるかは、大きな課題である。

研修を機に関連諸科学への理解を深め、その適正な活用についても今後十分な検討を加えてゆきたいと思う。

長野県史（考古部門）だより

○考古資料編（遺構・遺物）の基礎資料完成

昭和58年度より二年がかりで進めてきた長野県内遺跡の遺構・遺物実測図の集成作業がほぼ完成しました。これは現在までに発掘報告書・雑誌・市町村史等に発表された実測図を全てコピーにとって、253項目に分類してB5判大の台紙に貼付したものです。コピーは3万枚に達し、貼付台紙は遺構5千枚、遺物が1万枚で、個々の実測図の総点数は25万点に及ぶ膨大な資料集成です。これを基礎資料にしながら、掲載資料を厳選し、図版を組む予定です。

○通史編の章・節決定

昭和63年度発刊予定の通史第一編原始・古代の章・節が下記のように決定いたしました。今年度はこれを

もとに小項目を決め、本格的な執筆準備に入る予定です。

序 章 信濃史の舞台

第一章 原始の信濃

第一節 黒曜石の狩人たち

第二節 山河の幸と縄文人

第二章 科野国へ

第一節 イネとムラとクニ

第二節 古墳の主たち

第三節 科野国へ

○人事異動

4月1日付の人事異動により、樋口昇一氏の埋文センター転出に伴い、笹沢浩氏が飯山北高等学校より常任編集委員として着任いたしました。

埋文センター日誌抄（昭和60年2月以降）

- 2月26日 吉田川西遺跡出土品研究会 講師田口昭二氏（多治見市教委）（27日まで）
戸隠村公民館 分館長一行来所
- 3月5日 塩尻市南熊井地区埋文調査説明会
- 6日 八窪遺跡出土品研究会 講師神村透氏（木曾福島中）
- 22日 第6回理事会（昭和60年度事業計画、収支予算について）
大洞遺跡出土品研究会 講師小島俊彰氏（金沢美術工芸大）、泉拓良氏（奈良大）、今村啓爾氏（東大）（24日まで）
- 4月1日 副理事長が常勤となり、組織も改正。（組織機構欄参照）
- 22日 塩尻・松本市内 6遺跡で発掘調査開始
- 25日 全埋文協関東中部ブロック協議会（千葉県、3名参加）

人事異動

転 出

- 河西清光調査第一部長（諏訪二葉高校へ）
小林 至調査研究員（松本筑摩高校へ）
小柳義男調査研究員（上水内郡信濃町古間小へ）
熊谷由紀子主事（飯田保健所へ）

転 入

- 河原田幸雄副理事長（松筑地方事務所長から）
樋口昇一調査第一部長（長野県史刊行会から）
丸山敬一郎調査第二部長（伊那弥生ヶ丘高校から）
（他は2頁の組織機構欄へ）

昭和60年度発掘調査予定表（当初計画）

	遺 跡 名	対象面積 m ²	調査面積 m ²
塩 尻 市	竜 神	12,200	12,200
	竜 神 平	420	420
	山 の 神	10,800	10,800
	中 原	21,500	21,500
	犬 原	7,500	7,500
	上 木 戸	1,850	1,850
	千 本 原	7,660	3,000
	高 田	4,700	4,700
	吉田向井	5,660	5,660
松 本 市	吉田川西	9,700	9,700
	神 戸	39,840	39,840
	上 二 子	8,730	8,730
	下 神	13,600	13,600
	南 栗	39,200	10,500
	北 栗	20,760	10,500
	三 の 宮	150	150
	新村条里	72,720	24,550
	計	276,990 m ²	185,200 m ²

あとがき

昭和60年度埋文センターも組織機構欄に紹介したように組織改正及び増員が行われました。

埋文ニュースNo.13できました。年度末年度始めの大変お忙しいなか執筆御寄稿いただいた皆さん本当にありがとうございました。本年度も従来の編集方針により年4回発行する予定です。御意見御希望等ありましたら編集係までお寄せください。